

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その二十)

海老沢 敏

十一、日本人の歌として(承前)

明治三十年代に入って、軍歌の作詞作曲がいつそうさかんにっていったのは、当時の国策からは当然であつたらう。そうした中で、軍歌としての《見渡せば》がなお一般にひろく歌われていたことを示す文献が残されている。兵庫県御影町の殿村文盛堂なる書肆が明治三十五年に発行した遊戯研究会編《遊戯の実際》なる二二〇ページの書物がある。^(注41)

(注41) 《遊戯の実際》編者 遊戯研究会 右代表者 真木廉
吉 発行者 殿村善四郎 発行所 殿村文盛堂 明治三十五年二月二十八日発行

この書物は《総論》のほか、《第一部 競走を主とした遊戯》、

《第二部 行進遊戯》、《第三部 唱歌遊戯及体操》、《第四部 遊戯案内》および《附録》からなっているが、《第三部》の中には《第三 見渡せば》なる項目があるのが目次から読み取れる。^(注42) 当該箇所を開いてみよう。そこには譜例はないが、次のように歌詞が掲載されている。

「第三 見渡せば

歌(曲わ小学唱歌集卷一見渡せばと同じ) 見渡せば、寄せ来る、敵の軍艦おもしろや。見渡せば、沈みかゝる、敵の軍艦おもしろや。最早戦い勝なるぞ、いでや、艦隊せめかゝれ、弾丸こめて、打ち払い、敵の軍艦覆江せ。」

(注42) 同右書、一七五ページ—一七六ページ。

これはすでに歌詞を紹介した吉本光蔵作詞の《海戦》の《進撃》および《追撃》のテキストを抜萃し取りませたものである。

由である。加えて、体操と遊戯とを含む「体育科」を身体発育上からでなく「実用的の方面」から重視するという弊があらわなのである。体操重視の第二の理由は軍事的なものである。「すなわち体操わ兵役の準備演習である。軍紀教育の基礎とするものであるとの謬見が、大に世人を支配して、今でも其余毒が残っておるのである。学校教育で、唯一重要な体育科の本旨が、飛んでもない横道に妄用されたために、学校の体育事業の蒙った影響は、決して少なく^(注46)あるまい。」さらに第三の点は、逆に遊戯が体操にまさる理由が論じられていることである。体操は「一定不動の運動」、すなわち「他動的の運動」であるのに、遊戯は「自由的」、「発動的」であること。体操が「規律的」に筋肉運動にだけかかるのに対して、遊戯は「変化極まりのない、自然運動」として捉えられるのだ。^(注47)

(注46) 同右書、八ページ。

(注47) 同右書、八ページ。

遊戯は激しい「競走を主とした遊戯」とおだやかな「行進遊戯、唱歌遊戯」とから成っているが、編者は前者を食物を例として「滋養質に富める料理」とし、後者を「茶漬飯」と位置づけている。前者がより重要ではあるが、時には後者も必要であり、三種の遊戯は調和融通がのぞましいのである。^(注48)

(注48) 同右書、一四ページ。

本論では、このあと具体的な実例の紹介に入るが、「第三部 唱歌遊戯及体操」では、合計六曲の唱歌による遊戯と二曲の唱歌体操が解説されるのである。「第一 風車（幼稚園唱歌集）」、「第二 お月さま（幼年唱歌初編中）」について「第三 見渡せば」が置かれているが、軍歌「見渡せば」の歌詞による「動作の説明」を原文で紹介してみよう。

◎動作の説明

此遊戯わ尋常の初学年に適する。一隊の児童を円形にし、各生の間隔わ、左右手を繋ぐまでにしておく。『用意』で各手を垂れ円の中心に向う、見ワタ……で各生わ右手を額上に上げ同時に踵をあげて、爪立ちになる……セバ……で手も足も旧位置に復する。寄せ来ル……で全児童各手を繋ぎ右（左）方に回転する。敵ノ軍艦……手の繋ぎを解き右手を挙げて前方を指す。面白ロヤ……両手の掌を拍ち愉快の情を現わす。見ワタ……望遠鏡で覗き見る状左右の手の拇指と食指とで円を作り、両眼にあてる……セバ……で旧位置復す。沈ミカ、ル……両手を拡げて前方目の高さに伸ばし（掌を下方に向けて）徐々と下に下げて物の水中に沈む状をなす。敵ノ軍艦面白ロヤ……前の動作と同じことをする。最早戦イ……掌を拍ち（四ツ）。勝ち……

両手を上げて高く挙げ……ナルゾ……で下ろす。イデヤ艦隊
……手を繋いで前方（中心に向って）に進み、セメカ、レ……
……で旧位置に復す。弾丸ユメテ……折り敷きの姿勢左足の膝を
折り右足の膝を地につけ、左手を握って前方につき出し（鉄砲）
右手を握って弾丸をこめる状をなし。打ち払い……立ち上がる
と同時に両手を前方にさし出し左右に開きて前方に物のなき状を
示す。敵ノ軍艦……前の通り前方を指さす。覆エセ……掌を
拍つ但し此時わ左右の手を交互に上下にして合せか江る。^(注49)

(注49) 同右書、一七六ページ—一七七ページ。

こうして、日本の歌としての《見渡せば》は、ここで遊戯歌に
変容し、《唱歌遊戯》としてその姿を現わしたのであった。しか
しながら、編者が学校教育でも、体育科が、とりわけ体操が《兵
役の準備演習》であり、《軍紀教育の基礎》として捉えられてい
る点をつよく批判しているにもかかわらず、^(注50)この《唱歌遊戯》と
しての《見渡せば》は、軍歌としての《見渡せば》、すなわち《海戦》
の歌詞を用いることによって、またその歌詞にもとづく動作をお
こなうことによって、明治三十年代という軍国時代の、二つの大
きな外国戦争の間にはさみこまれた時期の試みであることをいみ
じくも象徴的なたちであらわしているのである。この《唱歌遊
戯》としての《見渡せば》を考察した兵庫県御影師範学校訓導諸

氏、すなわち遊戯研究会員諸氏が、英国および米国でおこなわれ
ていたいわゆる《キンダーガルトンリート》としての《ルソーの
夢》、あるいはそれが移入されたかたちの《葉キ景色ノ歌》を知
っていたものかどうかは定かでない。また同じように、この《唱
歌遊戯》が、後年の日本の遊戯歌としての《むすんでひらいて》
とどのように直接間接につながっているかについても、その解答
は将来の課題としなければならないのである。

(注50) 同右書、八ページ。

ところで、この《遊戯の実際》には《附録》がつけられてお
り、《体操科教授細目》、すなわち具体的な授業課程、カリキュラ
ムが紹介されている。体操科の《目的》としては、《一直接目的》
として《イ、身体各部の調和的発達を計る》、《ロ、健康と強壯と
を計る》、《ハ、行動を敏活にする》の三点、《ニ、間接目的》と
して《イ、精神を、快活、潔白、剛毅にする》、《ロ、規律を守
る、習慣を養う》、《ハ、協同一致の、習慣を養う》の三点が設定
されている。さらに《主義》としては、とりわけ《遊戯科》につ
いては、教師の熟練を前提としつつも、児童の自主性を尊重した
がら、彼らの個性を観察すべきことが述べられている。^(注51)

(注51) 同右書、一九九ページ—二〇二ページ。

最後に《教授細目表》が置かれているが、《見渡せば》はどこ

に位置づけられているものであろうか。尋常科第一学年では「体操」はおこなわれず、もっぱら「遊戯」が学ばれるが、ここでは

「唱歌遊戯」が八曲、「行進遊戯」が二曲、そして「競走遊戯」が一曲与えられている。第一期（自四月一日至五月二十五日）には「烏わかあゝ」、「舌切雀」、「お月さま」、「友どちの門」が、

第二期（自九月一日至十二月二十四日）には「軒伝い」、「風車」、「蓮の花」、そして「金太郎」が、そして第三期（自一月八日至三月二十五日）には第四週の「電報」と並んで第八週にほかならぬ「見渡せば」が置かれ、第九週、第十週と続けられるのである。^(注52)要するに「見渡せば」は、このカリキュラムでは、尋常科第一学年第三学期の最後の学習対象を形づくっている。

(注52) 同右書、二二三ページ。

おなじ明治三十年代にあって、「見渡せば」は、ほかにもいくつかのかたちで歌いつづけられることとなる。その一例は酒井勝軍編「新式日本唱歌 第一編」^(注53)であろう。この唱歌集の序で、編者は「時勢後れの音楽は用なきのみならず、又害あるものなり」と語り、最近では児童が唱歌を楽しむ機会がふえている点を指摘した上で、「窮屈なる思想より成りたる歌は最早今の児童に歌わしむべからず」と自分の立場を明確にした上で、「もし幸にして寒村の牧童、僻地の織女の愛らしき口に歌はるゝあらば、そは時

勢の賜なり」と述べている。^(注54)

(注53) 「酒井勝軍編 新式 日本唱歌第一編」明治三十七年（注54）同右書、一ページ。

この唱歌集では、「見渡せば」は「花見」と題され、次のような三節から成っている。

「花 見

ルーソー作曲

酒井勝軍作歌

一、山々にたなびく霞 おぼろに聞ゆる鳥の声

赤き白きこぎ交せて 乱れつ香へる桜花

自然の音楽調をあはせ天女の姿風に舞ふ

二、梅かと思れば柳なり 柳かと思れば桜なり

見る人々の心にまかせ 枝折る人の手に香ふ

乙女のかざせる一枝の花も我を教える神の旨

三、天には爛々花か雲か 地には燠々雲の花

都もひなも春の景色 にははぬ里もあらざらぬ

いざや名残に一枝折りて 袖にうつさん花の色

この「花見」の特徴は、歌詞の上で、原曲「見渡せば」の第一節、すなわち柴田清熙作詞の春の情景をさらに敷衍している点に

▼譜例 4

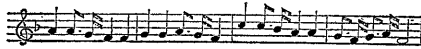
花 見



I やまやまに 花びらすみ 花るに 花るさりの 花の 花見
 川 ぬがさ 花は 甲 なぎ なり 花さ 花さく なり
 川に は アンパン 花は かくもが ちには アンパン くもが は



あは 花き きき 花き 花き 花き 花き 花き 花き
 あは 花き きき 花き 花き 花き 花き 花き 花き
 花き 花き 花き 花き 花き 花き 花き 花き



しん の 花き 花き 花き 花き 花き 花き 花き 花き
 い 女 の 花き 花き 花き 花き 花き 花き 花き 花き

唯 震む 勿れ 落に 歌ふ べし ゲーテ

あるといえよう。しかも《見渡せば》の原詩が都の春を歌っているのに対して、《花見》は田舎の春の景色を歌って原詩のパロディーといふべきものを形づくり、《自序》の結びの言葉に照応しているのである。譜例が示すように(譜例4)、楽曲はへ長調をとり、四分の四拍子ながら、《見渡せば》のように二分音符中心の動きでなく、《ルソーの夢》の原曲と同じく四分音符を基本とし、かつ附点つきのリズムをもった動きを見せている。

六

軍歌としての《見渡せば》がさかんにおこなわれていた時節に、それとはまことに対照的な牧歌調の、しかも日本的な自然の風景を歌った《花見》が立ち現われたことはまさに注目に値するものといえよう。この《花見》のもうひとつの特徴は《ルソー作曲》と謳われていることである。編者がこの情報を得たのは、およそ四半世紀近くも前のメイスン・伊沢による《大演習》の解説からか、それとも外国版の讚美歌集からとも考えられないわけではないが、おそらくは次に述べるルートからであつたらう。

《新式日本唱歌 第一編》が刊行された明治三十七年の前年の十一月にいわゆる《讚美歌委員会》の編集になる《讚美歌》が刊行された。^(註55)各教派を超えての共通の讚美歌集を編集しようという機運は明治三十三年の秋に盛り上り、以後三年間の努力の結果として生み出されたのが、この画期的ともいふべき《讚美歌》であつた。

(注55) 《讚美歌委員会編》《讚美歌》明治三十六年十一月十日発行、発行所 教文館、警醒社

この名高い《明治版《讚美歌》》について、ここで詳しく論じる必要はないが、セオドア・モンロー・マクネアが選曲を担当しているこの讚美歌集の第三十三ならびに第二百二十六の旋律が、ほかならぬ《グリーンヴィル》である。まず、二篇の歌詞を引用し

ておこり。

「第三十三」

一、かみよみめぐみを われらにそよぎ

よろこびにみちて みまへをさらせ

あいのはたらきを 世になさしめよ

二、植ゑしむことばを こゝろのはたに

しげらせみのらせ むすぶよき実を

あめなる御倉に たくはへしめよ

▼譜例 5

The Opening and Close of Service

8.7.8.7.7. Green Villa (COURSEAU)
 ASCRIBED TO JOHN FAWCETT 1773 JEAN JACQUES ROUSSEAU (1732-78)

原 奏
 開 閉 會

あ い の は た ら き を 世 に な さ し め よ
 よ ろ こ び に み ち て み ま へ を さ ら せ

よ ろ こ び に み ち て み ま へ を さ ら せ
 あ い の は た ら き を 世 に な さ し め よ

Lord, direct us with Thy blessing John 14:27

33 第三十三

わが平安を祈らば
 天の御糧にて

一、かみよみめぐみを われらにそよぎ

よろこびにみちて みまへをさらせ

あいのはたらきを 世になさしめよ

二、植ゑしむことばを こゝろのはたに

しげらせみのらせ むすぶよき実を

あめなる御倉に たくはへしめよ

三、主のめしうけなば よろこびいさみ

ありなるみどのに やすらにのほり

みすくひのちから たゞへしめてよ

三、主のめしうけなば よろこびいさみ

あめなるみどのに やすらにのほり

みすくひのちから たゞへしめてよ

「第二百二十六」

一、わがおほかみよ つよき御手もて

あれのにさまよふわれをみちびき

天の御糧にて あかしめたまへ

二、めぐみの泉を 湧あふれしめ

雲のはしらもて 行く方をしめし

わが楯となりて まもりたまひね

三、ヨルダンの岸べに臨めるときも

おそれず安然に かなたにわたり

稱へしめたまへ つきぬめぐみを

ジョン・フォロシット原詩（一七七三年）の第三十三は明治二十三年版の《新撰讚美歌》の《第十五 礼拝 閉會》のテキストにより推敲を加えたものであり、またウィリアム・ウィリアムズ の原詩（一七四五年）による《第二百二十六》はおなじく《新撰 讚美歌》の《第一百七十一》を手直したものであることは明らか であろう。いずれも日本語の歌詞としてはより明快で味の深いも

▼譜例 6

8.7.8.7.8.7. 1745
WILLIAM WILLIAMS

Greenville (ROUSSÉAU)
JEAN JACQUES ROUSSÉAU (1712-78)

8.7.8.7.8.7. 1745
WILLIAM WILLIAMS

信 徒 の 生 涯

信 徒

信 徒

Guide me, O Thou great Jehovah Ps. 107: 1; 5: 8

226 第一二一十六

前頁の續
はのほも
そこなひ
えとな
たはな
銀よ
のみぞ
五老のさか
こえん
かしの
ゆらつも
かほも
わが愛に
よそを
紅を
わが民

How firm a foundation, ye saints of the Lord (continued from opposite page)

のになつてゐる。

ところで譜例を見てもよい(譜例5および譜例6)。この曲譜は《新撰讚美歌》のそれとはかなり異なつたかたちをもっている。《新撰讚美歌》ではへ長調をとっている点は同じであるが、四分の二拍子で、第一部は四声体で書かれているのに対して、第二部(中間部)は三声体になつてゐる。また旋律線は附点音符のかたち(へ八、讚美歌としての《ルソーの夢》)の異稿対照表の②をとつてゐる。これに対して《讚美歌》の方は四分の四拍子で全

体が四声体で貫かれ、かつ最後に《アーメン》がつけられてゐる。また旋律線は異稿対照表の③(二分の四拍子)をそのまま四分の四拍子に変えたかたちのものである。ただし第二部の最後はちがつてゐる。《礼拝・開会閉会》に用いられる第三十三、《信徒の生涯・信頼》のための第二二十六のいずれも同一の旋律であるが、この旋律の名称、すなわちチューン・ネームは《グリーンヴィル(ルソー)》とあるほか、さらにその下に《ジャン・ジャック・ルソー(一七二一—七八)》といわゆる作曲家名が書き加えられてゐるのである。讚美歌としての《ルソーの夢》、すなわち《グリーンヴィル》は、こうして、この明治三十六年版の《讚美歌》の第三十三および第二二十六のかたちで、なお大正年代にかけて、さらに昭和にいたるまで歌われていくのである。(つづく)

(国立音楽大学)

〔訂正〕 前回の文章中「作詞者鳥居悦は当時東京音楽学校教授であつた」が、ほかならぬ《見渡せば》第一節の作詞者である。〔「」内を削除訂正しお詫びします。〕